

アツク。スタンプド

激動の日中関係史を証言する回想録

■上海時代-ジャーナリストの回想-

(上・中・下)

松本 重治 著

評／中嶋 嶺雄 去る一
月初旬、

北京に滞在していた私は、前回の訪中時には果たせなかつた蘆溝橋を訪れてみた。日中全面戦争への口火となつた蘆溝橋事件の歴史的な現場としては、いささか平凡すぎる石の大橋であったが、附近に残る城壁の一角に印された当時の弾痕も見る事ができて、やはり感慨深いものがあった。その際、小川平四郎・駐中国大使は、私の蘆溝橋見学のために、松本重治『上海時代』の「蘆溝橋事件の突発」の項がきわめて興味深く綴られてゐるからと、『上海時代』を連載中の『歴史と人物』誌を携行するように手渡して下さつた。このように著者の回想録は、すでに雑誌に連載中から大方の注目を集めていたのである。

本書は、著者が一九三二年末から三八年末までの六年間、聯合通信(同盟通信)上海支局長として活躍した時代の回想録であるが、この時代は満州事変以後の日本の中国進出、西安事件、第二次国共合作による抗日統一戦線の結成、そして日中全面戦争へと日中関係史の焦点が相次いで旋回し、ついには両国の衝突をもたらした時代であり、このような激動の時代の証言者として著者ほどふさわしい人は見当らないであろう。周知のように著者は、たんにジャーナリス



をおこなつたときの叙述であろうが、そのような渦中にありながらも、歴史の目撃者としての著者の眼はさめてゐる。著者が若き時代、国際的な知友をもつことに情熱を傾けたことも、著者が戦後、国際文化会館を創立して民間国際交流の礎石を築いたことへと接続するのであるが、本書には、そのような著者の領域の達成を知る素材も数多い。一貫して恵まれた環境に育ち、「インターナショナル・ジャーナリストになりた」という若き日の志望を果たした著者

が、いまはみずから「オールド・リベラル」として任時を回想しつつ、「日本人は、隣国人の気持をもつとよく理解して欲しい」と訴えるとき、その言葉のもつ意味は決して軽いものではない。なお、本書は、たんなるメモワールではなく、同時代史の史料としてもきわめて詳細なものであり、著者が史実の再現に並ばならぬ資料的な努力を払われたあとがりがわかる。日中関係史の一つの遺産がここに生まれたといえよう。

■中公新書・各四八〇円■

暗号名Ⅱ 鑄掛け屋、仕立屋、兵士、スパイ ■ティンカー テイラー ソルジャー スパイ

ジョン・ル・カレ 著
菊池 光 訳

評／各務 三郎 ミステリ好きのかたなら、人間味あふれる「アイアゴ」の悲劇の現代版ともいふべき『寒い国から帰ってきたスパイ』(一九六三年)を憶えておいでしやう。ヨーロッパ、一九五〇年代における東西両陣営の熱い冷戦ゲームを背景にしたスパイ小説の名作で、すでに古典視されているほどです。一

文壇告知板

吉村 昭



オシドリ作家というものは、ハタから見ていると、何とも奇妙なものである。なにしろ、一つ屋根の下で、一組の男女が机に向かつて、小説書きという「孤独な作業」に従っている図は、いかに男女共学があたりまえの世の中とはいへ、想像するに奇妙である。

面白いことには、しかも、オシドリ作家の場合、その活躍ぶりが、とかく、女性上位になりがちである。人生論「誰のために愛するか」や、小説「虚構の家」で、すっかりベストセラー作家になつてしまつた曾野綾子と、その夫で、「妻をめぐらば曾野綾子」と色紙に書きこざるを得なかつた三浦浦門の場合は、その一例であろう。

さて、ここに登場する吉村昭の場合も、初めのうちは、似たようなものだった。吉村の細君・津村節子が作家であることは周知の通りだが、その津村は昭和四十年に「玩具」という作品で芥川賞を受賞した。吉村が『星への旅』という作品で太宰